

**主 題：王の到来を告げる先駆者****聖書箇所：ヨハネの福音書1章19－28節**

きょう私たちはタイトルにもあるように「王の到来を告げる先駆者」について、特に1：19－28を中心に考えてみたいと思います。まずはいつものようにみことばをお読みしますので、それぞれよく神様のことばに耳を傾けてみてください。

**ヨハネ1：19－28**

「19 ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。20 彼は告白して否まず、「私はキリストではありません。」と言明した。21 また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」22 そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」24 彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった。25 彼らはまた尋ねて言った。「キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」26 ヨハネは答えて言った。「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。27 その方は私のおとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」28 この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のベタニヤであって、ヨハネはそこでバプテスマを授けていた。」

さて、きょうの内容に入っていく前に一つ質問があります。もし、きょうだれかがあなたのところにやって来て、その人に「あなたはどなたですか？」と尋ねられたら、皆さんはどのようにして答えるでしょうか？自分の名前を教えるでしょうか？自分の出身地や職業を教えるでしょうか？自分の家族構成を教えるでしょうか？自分の趣味を、また友人関係を教えるでしょうか？どうでしょうか？「あなたはどなたですか？」と聞かれたなら、私たちはまずどのようにして答えるでしょうか？

きょう私たちがみことばから見ていきたいのは、バプテスマのヨハネと呼ばれる人物についてです。この人物について、私たちは以前にも一緒に考えましたが、ヨハネというのは、救い主イエス・キリストの道を整えるために神様から遣わされたすばらしい先駆者、証人でした。ちょっと大きな目で1章全体を見渡してみてください。この1章全体を考えてみても、著者のヨハネは、バプテスマのヨハネに関して何度も何度も言及していたのです。例えば今まで見てきた1：1－18の中で、バプテスマのヨハネについて何回触れられていました？どこにあります？ちょっと見てみてください。ヨハネという人物は最初6節に出てきて、次に7節に出てきて、そして8節に出てきて、そして少し飛んで15節にも挙げられていたのです。著者ヨハネは、今まで見た1－18節で、すでに4回もバプテスマのヨハネについて触れていました。そしてこれから私たちは19節からあとの部分を見ていくのですが、さっと見ても、彼の名前、彼の姿をここに繰り返し繰り返し見て取ることができます。バプテスマのヨハネという人物は、まさに1章を見ても話題の中心にあった、そのような者でした。

でも同時に不思議なことがあります。それは、彼の名前は何度も何度も出てくるにもかかわらず、話の中心、スポットライトはいつもヨハネではなくて、イエス・キリストに当たっていたということです。バプテスマのヨハネというのは、どんな時も自分ではなくてキリストに焦点を置いて歩んでいた、そんな証人でした。バプテスマのヨハネという人物は証人としての最高の模範でした。そして、そんな彼もある日、「あなたはどなたですか？」と問われた時があったのです。いったい、証人としての最高

の模範の彼は、どんなふうに答えたのでしょうか？そして私たちは、その姿、その模範から大切なことを今学ぶことができます。キリストによって救われた私たちひとりひとりも今、キリストをあかしする者として歩んでいます。その証人に必要な特に二つの態度をヨハネから学ぶことができるのです。それをきょうは一緒に学んでみましょう。

## ○先駆者ヨハネ：キリストの証人に必要な二つの態度

### 1. キリストに人々の目を向けること 19-23節

一つ目の態度は、「キリストに人々の目を向けること」です。バプテスマのヨハネは、自分自身に、ではありません。焦点を当てるべきお方に、人々の心をいつも留めさせようとしていました。19節はこんなふうに始まっています。「ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。」さて、この場面を考えていく前に、背景を思い出してみましょう。このバプテスマのヨハネの働きというのは、この時にはもうすでに人々の間で大きなものになっていました。荒野に現れたヨハネのもとには、毎日のように多くの人たちが集ってきていたのです。当時の様子がマルコの福音書にも描かれていました。マルコ1:4-5にこのように書いています。「4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。5 そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。」はっきりと記されていたように、ひとりふたりの話ではありませんでした。ユダヤ全国の人たち、エルサレムの全住民が彼のところに集まってきていたのです。ヨハネの姿を一目でも見たい、ヨハネの話を聞いてみたい、ヨハネからバプテスマを受けたい、と多くの人々が日々彼のもとに押し寄せていました。間違いなくこの時、ヨハネは人々の間で最も熱い話題の中心人物だったと言っても過言ではなかったでしょう。でも考えてみれば、それもそのはずですね。この同じ1:6でみことばを学んだ時にも触れましたが、バプテスマのヨハネという人物は、約400年もの間イスラエルの民が待ち望み続けていた存在でもありました。いま一度マラキ書を開いて3章を見ると、旧約聖書の最後に記されたこの書の中で、神様はこんな約束をイスラエルの民に与えています。まず3:1には、「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。……」と。ページをめくって最後の4:5-6を見ると、「5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日に来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」と書いていました。こうして神様はイスラエルの民たちに約束を与えました。そして文字通りこの神様の約束、神様のことばが与えられてから実に400年もの長い空白の時間、沈黙の期間があったのです。神様から「道を整えるひとりの使者が与えられる。」という最後の約束を耳にして以来、彼らはほかに何も聞くことはありませんでした。神様のことばを聞くのが日常だったイスラエルの民たちにとって、不思議だったでしょう。神様はいったいどこにおられるのだろうか？神様の約束はいったいどうなってしまったのだろうか……？と、確かに彼らは思っていたでしょう。

こうして約束された時からイスラエルの民たちは長い間待ち続けていました。そしてそんな彼らのもとに突如として現れたのが、バプテスマのヨハネだったのです。だから彼のもとには大勢の人たちがやって来ました。想像できません？町でも村でも、いろんな場所で人々は絶えずさまざまなことを口にしていました。突然現れたあのバプテスマのヨハネの話を聞いた？荒野に現れたヨハネをあなたは見に行った？彼の語っている神様や、彼の語っている救い主の話は、ほかの宗教家たちとは全然違う。だから私たちも見に行こう！……と。そのようにして人々は押し寄せていました。ヨハネはまさに人々の興味や関心の中心にいました。人々の目は彼に一心に向けられていたのです。

もちろんその状況を好ましくないと思う人たちもいました。だれだと思えます？当時のユダヤ人指導者、ユダヤ人宗教家たちでした。彼らは、人々の注目の的になっていたこのヨハネをどうしようかと、

扱いに困っていました。本来なら自分たちの方に向くべき関心を奪っているそのヨハネという人物がいったい何者なのか、それを確認する必要が生まれてきました。そこで彼らは調査隊を送りました。それが、今私たちが見ているこの1：19の場面になるのです。調査隊がヨハネのもとに送られてきました。ちなみにこの19節の中で使われていた「祭司」と「レビ人」というこの二つの存在。彼らは当時、神殿で行われていた礼拝を助けるだけではなく、その神殿を守る警備員のような役割を担っていた者でもありました。特にこの「レビ人」というのは、神殿を守っていた警備員のような役割を担っていたのです。皆さんはどんなイメージを抱くか分かりませんが、19節を私たちが読むときに、何かよぼよぼのおじいちゃんたちがヨハネのところに杖をつきながらやって来て、「あなたはどちら様でしょうか？」と尋ねていたのではないということです。指導者から明確な任務を託された屈強な男たちが、厳しく彼を尋問したのです。いったいあなたは何者なのか？突如現れて、人々を教えて、バプテスマまで授けている、そんなあなたは何のつもりなのか？「あなたはどなたですか。」と。非常に緊迫した場面がこの19節から記されているのです。そんな中であってヨハネはキリストの証人としてすばらしい大胆なあかしを立てていました。

では、どんなあかしを立てていたのか。続きを見てください。彼らの問いに対してヨハネはまず20節でこのように答えています。「彼は告白して否まず、「私はキリストではありません」と言明した。」と。この答えを聞いて不思議に思った人はいませんか？ヨハネは何と質問されていました？ヨハネは、「あなたはキリストですか。」と質問されていたのではありませんでした。彼らはただ「あなたはどなたですか。」と尋ねていたのです。でもヨハネはわかっていました。質問の背後に隠されていた彼らの本心に気づいていたのです。だから彼は「私はキリストではありません。」と言明しました。ちょっと考えてみてください。旧約の時代から、すべてのユダヤ人たちというのは、約束の救世主、メシヤの誕生を待望し続けていました。そして特にこの時代において、ローマ帝国の支配によって苦しめられていた人たちは、その支配から自分たちを解放してくれる、そんな救い主の現れを今か今かと待ち望み続けていたのです。この当時の人たちの心の内にあつたその思いが、ルカ3：15を見るとこんなふうにかかれていいます。「民衆は救い主を待ち望んでおり、みな心の中で、ヨハネについて、もしかするとこの方がキリストではあるまいか、と考えていたので、」突然現れたヨハネに対して人々は、この人はキリストではないか？この人はメシヤではないか？と考えていました。もしそんな思いを抱いている彼らに向かって、ヨハネが少しでも「私はキリストです」などと答えていたとしたら、いやもっと言えば、少しでも答えを濁していたなら、彼らはそのヨハネを先頭に立ててローマに戦いを挑むようになっていたでしょう。苦しめられているところから解放されるために何千人もの人たちが一斉に立ち上がり、全世界が戦いに巻き込まれることになっていたでしょう。ユダヤ人はそうやって自分たちを圧政から救い出してくれるそんな政治的な軍事的なリーダーを求めていたのです。人々の本心に気づいていたからこそ、ヨハネははっきりと答えました。「私はキリストではありません。」と。しかも皆さん、20節を読んでいて気づきましたか？ここで彼はそのことを軽く否定していたのではありません。彼はその事実を何と書いていました？彼は「告白して」「否まず」「言明した」というこの三つのことばで表していました。ちょっとこれではわかりにくいかもしれませんが。ですからこの部分を原文そのままに訳すとすると、「彼は告白して否定せず、告白しました。」というふうに直すことができます。つまりここでヨハネは「告白する」という同じことばを2回使っていたということです。「告白して、否定して、告白しました。」と。要するに彼は、その事実は違う、ということだけを単に否定しようとしていたのではありません。その事実は絶対に絶対に違うということ、ことばを重ねることによって強調していたというわけです。ヨハネはだれひとりとして混乱することのないように断言していました。「あなたがたが考えているようなキリスト、私はそのような者ではありません。」と。ヨハネはそのようにして、自分自身とキリストの関係を極限まで引き離して表していたのです。証人のヨハネは、自分自身に目を向けさせようとしていたのではあ

りません。ヨハネは、ほかのものに目を向けさせようとしていました。「私はキリストではありません。」

その答えを聞いた調査隊は、次に二つ目の質問を投げかけます。21節にこのように続いていました。「また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」」この質問はある意味理解できるものでした。最初に見ましたが、神様は預言者マラキを通して「ある人物が遣わされるのだ」と約束しておられたのです。人々は待っていました。だれを待っていました？神様はどんな人を送ると言われていました？神様は、救い主、メシヤが来る前に、「預言者エリヤが現れるのだ。」と預言しておられたのです。それをユダヤ人たちはずっと待ち望み続けていました。だからこそ現れたヨハネに対して質問するのです。「キリストじゃないって言うんだったら、メシヤじゃないって言うんだったら、あなたはあのエリヤですか？」と。おもしろいのは、突如として現れたこのヨハネは、かつてのエリヤのような服装をしていました。エリヤはどんな服装していたのか？そのことに関してはⅡ列王記1：8にこんなふうに書いています。よく聞いてください。「彼らが、「毛衣を着て、腰に皮帯を締めた人でした」と答えると、アハズヤは、「それはティシュベ人エリヤだ」と言った。」エリヤは「毛衣を来て、腰に皮帯を締めた人」でした。では思い出してください。ヨハネはどんな格好をしていたでしょう？ヨハネの格好に関してはマルコ1：6にこう書いています。「ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。」と。これ、すごく似ていると思いませんか？しかも覚えています？エリヤはこの地上での生涯の最後をどのようにして終えていました？彼は死ぬことなく、火の戦車とともに竜巻に乗って神様によって天に上げられたのだとⅡ列王記が教えてくれているのです。（Ⅱ列王記2：11）ヨハネの姿を目にした彼らは思いました。服装も似ていると。かつてのエリヤのようにこの人物も神様のことばを大胆に伝えている。この人物こそ、かつてあの地上を歩んでいたまさに預言者エリヤではないかと。でもそれに対してヨハネは答えるのです。21節「彼は言った。「そうではありません。」」ヨハネは否定しました。もしかするとある人はこの答えを聞いて疑問に思ったかもしれません。というのも、このバプテスマのヨハネに関して、後にイエス様ご自身が「この人物はエリヤなのだ」と表現している箇所もあるのです。マタイ17：12-13にこんなふうに書いています。「：12しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。……」：13 そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと気づいた。」と。このヨハネとエリヤとの関係については、また詳しいことを別の機会にも見られたらと思います。でも覚えていてほしいのは、ヨハネの答えとイエス様のここでのことばというのは、矛盾しているではありません。イエス様は彼のことをそのように扱いました。でも、自分の価値を正しく知っていたヨハネ自身は、自分とエリヤをそのように結びつけようなどとはしなかったというわけです。ヨハネは文字通り預言者エリヤではありませんでしたし、エリヤと同じような存在として扱われることを拒みました。彼は人々が自分に目を向けるようなことから、極力離れようとしたのです。人々の目をどうにかしてそこから逸らせようとしてしました。そして自分にではなく、別のものにその目を向けさせようとしていたのです。「あなたはエリヤですか。」「そうではありません。」またしても思っていた回答が返ってきませんでした。

だから調査隊は三つ目の質問を続けて投げかけます。21節の続きにこう書いています。「あなたはあの預言者ですか。」と。皆さん、小さなことばですけど、これを絶対見逃してはいけません。調査隊はここで「あなたは預言者ですか。」とは聞かずに「あなたはあの預言者ですか。」と尋ねていました。つまり、聞いている人たちは「あの預言者」…特定の預言者のことを聞いていました。「あの預言者」とは、いったいだれのことを指しているのでしょうか？ご存じの方もあるかもしれませんが、当時のユダヤ人というのは、かつてモーセを通して与えられた一つの約束をよく覚えていました。どんな約束だったか？申命記18：18節にモーセを通してこんな約束が神様からなされていました。「わたしは彼らの同

胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう。わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる。」人々はずっと待ち望んでいました。神様から与えられたことばを大胆に告げ知らせる、そんなある預言者の現れを待っていたのです。そして人々はヨハネが人々の間で神様のことばを大胆に熱心に宣べ伝えているその様子を見たのです。それは思いますよね、「あなたはあの預言者ですか。」と。ヨハネはその問いに簡潔に答えました。21節「彼は答えた。「違います。」」と。立ち止まって調査隊の立場になってみてください。彼らは自分たちが思いつくりの人物を挙げました。「あなたはメシヤですか。」「あなたはエリヤですか。」「あなたはあの預言者ですか。」と。でも、そのすべてに対してヨハネは「違います」「違います」「違います」と答えたのです。間違いなく彼らは混乱したでしょう。もっと言えばいらいだちさえ募らせていたでしょう。彼らは、彼らを遣わした者たちのところに戻って答えを持っていかなければなりません。だからしびれを切らせてこんなふうには訴えかけました。続く22節にこう書いています。「そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」」この問いに対してヨハネは次の23節で答えを与えていました。よく見てください。ここに証人として私たちも見倣うべきへりくだりの模範を見て取ることができます。23節「彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」ヨハネはイザヤ40：3を引用していました。そして、ここで彼は自分のことを「私は荒野で叫んでいる者の単なる声なのだ。」と口にしたのです。「声なのだ」と……。

でも立ち止まって考えてみると、バプテスマのヨハネは「声」以外にも自分のことを正直に表すことは可能でした。自分のことを紹介しようとするれば、ほかにもいろんなことを言えたのです。例えば、自分の不思議な誕生について口にすることもできました。やって来た人たちに対して、「私がだれだか知りたいですか？私はですね。あのザカリヤとエリサベツの子どもなんです。年をとって子どもなんて絶対にできないと思われていたあの彼らの子どもです。」と言うこともできましたし、加えて彼は、自分自身とイエス様との関係についても口にすることもできました。そうですね。「ああ、イエス・キリストについて皆さんはいろんな話を聞いていますよね。実を言うと、私は彼のいとこなんです。」と。これだけではありません。彼は「私は、人々が長い間待ち望んでいた主の道を整える使者であるのだ」と口にすることさえできましたし、また後にイエス様もヨハネのことを、「『…女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。…』」（マタイ11：11）と述べられました。彼は自分のことを「イエス様が言われていたように偉大な者なのだ。」と口にすることさえできたのです。覚えていてほしいのは、これは、うそ偽りではありません。誇張した大げさな話でもありません。ヨハネは自分自身の正体を素直に告げることができました。さっき挙げたことに何もうそは入っていません。自分自身の自己紹介をしようと思えば、それを出すこともできたでしょう。でも、それをしなかったということです。告げることができることを彼はしませんでした。告げていれば、彼はますます多くの人たちからの称賛や注目や人気を集めることができたでしょう。でも心からへりくだっていた彼は、人々の関心や興味を自分に向けることにつながるいっさいの事柄を取り除こうとしていたということです。ヨハネは「ことば」ではありませんでした。ヨハネはただの「声」でした。

皆さん「声」とはそもそもどんなものですか？「声」というのは、だれの目にも見ることはできません。「声」というのは、だれかにことばを伝えるのに用いるものです。こんなことを経験したことありません？例えばその伝える声、ガラガラ声やキンキンした痛い声になってしまう、要するに「声」自体が目立つようになってしまうと、伝えられるべき「ことば」が、その内容が、相手に正しく伝わらないことがあるのです。本来であれば「声」ではなくて「ことば」が伝えられるべきなのに、「声」が目立ち始めると「ことば」が伝わらなくなるわけです。ヨハネは「声」としての自分の立場、役割をよくわかっていました。だからこそ彼は、自分が人から受け入れられたいなどということは、思っていなか

ったのです。彼は自分が何者でもなく、むしろ偉大なキリストに人々の目を向けること、そこだけに焦点を置いていました。「ことば」であるお方に人々の目を向けさせようとしたのです。「声」自体が目立ちようとは決してしませんでした。

それを考えるときに、果たして私たちはどうでしょう？私たちは自分自身のことをそんなふうに見ているのでしょうか？皆さん、私たちひとりひとりも証人として生きています。証人として自分に目を向けさせることに心が囚われているか、それともキリストに人々の目を向けさせることに心を留めているのでしょうか？どうです？ヨハネは自分に焦点を向けさせようと思えばいくらでもできました。彼自身の生い立ちに目を向けさせることもできましたし、彼自身のやってきた働きに目を向けさせることもできました。彼自身のイエス様との関係に目を向けさせることもできましたし、彼自身の偉大さに目を向けさせることもできました。目を向けさせようと思えばいろんなことができたのです。でもそれらすべてを全部横に置いて、ただイエス・キリストに人々の目が行くようにしました。そのことを私たちが覚えるときに、私たちがなしている日々の生活のこと、証人として、果たして自分に焦点を向けることを求め続けていないのでしょうか？人から称賛や感謝や、受け入れられることを求め続けていないのでしょうか？忘れてはいけないこと、それは、興味も関心も称賛も賛美も、値するのは「ことば」であって「声」ではないということです。バプテスマのヨハネはイエス様の道を整えるその先駆者として、「声」として、へりくだって、キリストに目を向けさせようと思いました。それを己の喜びとして歩んでいたのです。それが、私たち、同じ証人として生きている者に必要な一つ目の態度でした。

## 2. キリストの偉大さを覚える 24-28節

次に、証人に必要な二つ目の態度は、「キリストの偉大さを覚えること」です。もう一度みことばに戻っていただいて、ヨハネから納得できる答えを得られなかった調査隊は、ヨハネに対して新たな疑問を投げかけます。24-25節にこう続いていました。「:24 彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった。:25 彼らはまた尋ねて言った。「キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」」遣わされた調査隊はこの時、非常に大きな困惑と怒りを覚えていました。というのも、思い返してみてください。人々の注目を集めていたヨハネというのは、神様のことばを大胆に宣べ伝えていただけではありません。彼は心から悔い改める者たち、多くのユダヤ人たちにバプテスマを授けていたのです。そしてそのバプテスマを授けている時に、自分のもとに間違った態度でやって来るようなパリサイ人には、こんなことばを投げかけることもありました。マタイ3:7-8にヨハネのことばがこのように記されています。「:7 しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。:8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」と。当時人々からの評判を何よりも気にかけていて、そして律法を熱心に守り行っていたパリサイ人たち。そんな彼らがこのことばを聞けば、不服を抱き腹を立てていたでしょう。ましてやそのヨハネが自分のことを「キリストでも、エリヤでも、あの預言者でもない。」と言うのであれば、彼らは確実に思っていたでしょう。では、いったいあなたは何の権限で語っていて、バプテスマを授けているのですか？と。その問いに対してヨハネがとっていた応答は興味深いものでした。彼は自分の立場や権威をどうにかして弁護しようとしたわけではありません。そうではなく、こんなふうに答えています。26-27節「ヨハネは答えて言った。「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。:27 その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」」と。ヨハネは何をしています？ヨハネがしていたのは、自分のあとから来られるその最高のキリストに人々の目を向けることでした。気づかれたかと思いますが、ヨハネは質問に答えていませんね。質問に対する答えを挙げるのではなく、イエス・キリストに人々の目を向けさせようとしたのです。何度も言いますが、ヨハネ自身も確かに偉大な存在でありました。でも、その彼は決して自分を誇りとするこ

なく、より偉大なキリストの前にへりくだっていたのです。彼はキリストを通して自分自身の姿を正しく捉えていた人物でした。ここで彼は特に自分のことに関して、「その方のくつのひもを解く値打ちもありません。」と言っていました。この、だれかの「くつのひもを解く」という行為は、この古代社会において、奴隷に与えられていた最も卑しい仕事でした。ご存じの方もあると思いますが、当時の人たちは裸足にサンダルのようなものを履いて道を歩いていました。その道は今のようには舗装されていたようなものではありません。砂埃はいつも舞っているし、あちこちには泥だまりがあったり、加えていろんな動物の死骸や糞が散乱していたりするのです。そんな道を一日中歩いていれば、その足はひどく汚れました。その足はひどく臭いました。そしてそんな汚い足に触るのは、人々から忌み嫌われる恥ずべき奴隷の仕事だったのです。「くつのひもを解く」その働きは、最低の奴隷がなす働き、仕事だったのです。でも、皆さんここでヨハネは何と言っていました？ヨハネは「その方のくつのひもを解く値打ちもありません。」と。つまりヨハネは、最低の奴隷がなすその仕事ですら、自分には全く値しないものだと思っていたということです。あまりにも偉大なキリストの姿を覚えるその時、彼はキリストの奴隷となることすら自分には到底値しない特権なのだと思っていた、ということです。

それを考える時、果たして私たちはどうでしょうか？ヨハネのように、偉大な主の姿を私たちは正しく覚えて、この方の前にふさわしくへりくだっているのでしょうか？キリストの奴隷として私たちが仕えることができるというのは、自分にはそもそも値しない特権なのだと感謝しているのでしょうか？そして、キリストの奴隷として、自分ではなく、人々がキリストに目を向けることを何よりも喜びとしているのでしょうか？それとも、私たちは心のどこかで、キリストに仕えることができるということも、キリストの奴隷となるということも、何かしら当たり前前に自分に値するものであるかのように考えていないでしょうか？

立ち止まって少し考えてみてください。私たちがみことばを見ると、キリストによって救われた者たちの一つの大きな使命がこんなふうに描かれています。Ⅱコリント5：20「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです…。」パウロははっきりと教えていました。イエス・キリストを救い主、主として信じた者はみなだれであれ「キリストの使節」なのだ、ということです。神様と和解した私たちは、その神様から和解の務めとことばをゆだねられている、そんな主の使者として今を生きているということです。そしてこの「使節」という存在は、遣わして下さった者を代表する者でした。だからこそ、もし国の代表として遣わされている者が、遣わして下さったその王様の意向やことばを正確に伝えなかったら、そこには当然混乱が生じます。ましてや伝えないだけではなくて、王様の意図と全く異なる自分勝手な要求をなすようなことがあれば、それは国家間の大きな問題になってしまうでしょう。そのようにして「使節」が問題を起こすと、だれが一番辱めを受けるのかというと、「使節」ではありません。「使節」を遣わした王様に泥を塗ることになるのです。

改めて自分のこととして考えてみてください。果たして私たちは自分たちの務めを正しく覚えているのでしょうか？皆さん、私たちは同じです。恵みによって、キリストによって、信仰によって救われました。救われた者たちはみな、キリストを代表する者として「キリストの使節」として今を生かされています。キリストをあかしする者として今を生かされています。王を代表する者として歩んでいるのです。でもその王を代表するはずの私たちが、いつも自分のことに捉われていたりしないのでしょうか？ひとりの牧師、ポール・トリップ先生もこんなことばを残していました。そこにこんなふうには書いています。先生はこの大使という仕事に関してこう説明を加えるのです。「大使の仕事は、誰かや何かを代表することです。彼が行うことや話すことはすべて、物理的にその場にいない指導者を意図的に表すものでなければなりません。大使の任務は、週40時間に限られたものでも、特定の国家行事や国際危機の時に限られたものでもありません。大使は常に王の代表なのです。…キリストの大使になると、私たちの人生はもはや自分のものではなくなります。自分の人生が王のものであることを認める必要があるの

す。しかし、ここで私たちは問題に直面します。私たちは実際のところ、大使として生きたいと思っていません。むしろ、自分自身が小さな王として生きたいのです。私たちは自分が何を好むか、誰と一緒にいたいかわかっています。どのような家に住みたいか、どんな車を運転したいかもわかっています。気付かないうちに、私たちは「私の望み、私の意志、私のやり方」という生き方にすぐに陥ってしまうのです。正直に言えば、私たちの心の中心にある祈りは、「私の王国が来ますように、私の意志が為されますように」です。だからこそ、キリストの弟子になるためには自分に死ななければならないと述べました。二人の主人に仕えることはできません。大使は、真の王を代表する前に、自らの王権に対して死ななければならないのです。」と。皆さん、私たちは自分自身の王権に対して死んでいるのでしょうか？日々それに対して死に続けているのでしょうか？忘れていけないこと、それは、私たちは今感謝なことにキリストの使節として、キリストを代表する者として生かされているということです。かつて神様に敵対していたそんな私たちが、かつて罪の中に死んでいたそんな私たちが、かつて神の御怒りを受けるそれだけに値したそんな私たちが、今恵みによって救われ、そして神様をあかしする者として、神様を代表する者として今生かされています。その特権を私たちは与えられているのです。そして、そんな私たちはだれひとりとしてふたりの主人に仕えることはできません。キリストによって罪を赦され、恵みによって救われたと言うなら、私たちはその瞬間、その時、神様に仕える使者として、神様から和解のこトバを託されました。そうだとするなら、果たして私たちはキリストを代表する者として、キリストをあかしする者として、それにふさわしい歩みをなし続けているのでしょうか？ヨハネは自分のことを「キリストのくつのひもを解く値打ちすらありません。」とへりくだっていました。そのようにへりくだっていたからこそ、自分に目を向けさせることなどどうでもよくて、その偉大な主に仕えることを何よりも喜んで、その偉大な主とともに歩むことが何よりも大きな特権なのだ感謝し続けていました。

そして、これは今の私たちも同じです。日々の生活の中にあって私たちが仕え続けることのできるキリストは、まことの神様です。ヨハネの福音書1：1から繰り返し見続けてきました。イエス・キリストこそ、すべてを造られた創造の主でした。イエス・キリストこそ、永遠に変わることはない主権者でした。イエス・キリストこそ、いのちの源であって、イエス・キリストこそ、やみに必ず勝利されるまことの光だったのです。皆さん、私たちには想像もできないほどの偉大な力を持ったそのお方が私たちの主人としてともにいてくださって、私たちはこの方に仕えることができるという特権を恵みによって与えられています。そうだとすれば、へりくだってこの方をあかしし続けていくことです。自分に目を向けさせる必要はもうありません。私たちはそのために生きていません。私たちはヨハネと同じです。

「声」だということです。ヨハネは人々に「あなたはどなたですか。」と尋ねられたその時、彼は答えました。「私は、……荒野で叫んでいる者の声です。」と。私たちはその問いに対してどう答えるでしょう？私たちも「声」として、すばらしい主を見上げて、この主に人々の目を向けるために、ともに歩いていきましょう。